



## 2号館の姿見

公共政策学部長 吉岡 真佐樹

その昔、本学文学部社会福祉学科に勤め始めて間もないある日、2号館西側の階段の踊り場に、大きな姿見（全身を写す大形の鏡）があることに気がついた。文字通り、頭から足下まで全身が映る。女子専門学校の伝統を持つ本学らしい調度だと感じ入り、ほどなく、毎朝この姿見で身だしなみを確認する習慣が身についた。ネクタイは曲がっていないか、髪の毛がはねていないか、ズボンのファスナーが開いていないか、上着にクリーニングのタグが付いていないか、などなど。

それから二十年近くが経ったある日、私はある大学教員の退職記念会の折に、久しぶりに知人の研究者に出会った。私とほぼ同世代の彼女は、かつて本学文学部に入学し、やがて他大学に再入学して心理学を学び、当時すでに一分野を代表する研究者となっていた。彼女は、私の顔を見ると、なつかしように次のように語り始めた。

「吉岡さんは、府大の文学部にいるんやね。文学部の建物の階段に、大きな鏡があるでしょう。あの鏡には、私、特別な思い出があるの。私は教養時代、文学が好きで文学部に入学して、楽しく勉強していたけど、ある時、心理学の勉強がしなくなった。何日も何か月も悶々と考えたあげく、このことを〔当時文学部社会福祉学科にいた〕ある先生に、相談に行こうと決心したの。ところが3階の先生の部屋の前まで行くと、どうしてもドアをノック出来なくなってしまった。しばらくその前にいたのだけど、どうしてもノックする勇気が出なくて、帰ろうと3階からとぼとぼと階段を下りていくと、あの姿見があって、私が映っていた。ふと立ち止まって、鏡のなかの私を見ると、その鏡に映った私の瞳が、じっと私を見据え『あなたは後悔しないの』と見つめていた。私は、鏡のなかの私の瞳をじっと見つめ、そしてもう一度3階に行ったの……。」

彼女は翌年、大学を再受験して新たな分野に進むことになった。そして現在では、多くの人々に頼られる研究者となっている。

2号館の姿見は、ここで学んだすべての人々のドラマを映してきた。私自身、彼女の話聞いた翌日からはこの鏡の前で別の私を見ようとするようになった。——私の瞳は、まだ生きているか、初心を忘れてはいないか——

.....

後記：ここでは省略していますが、彼女は、文学部文学科で学んだことは今でも大きな心の糧になっているし、研究上もとても役だっていると言っていました。誤解のないように。

また、この会話があった当時、私は福祉社会学部（公共政策学部の前身）の所属になっていました。（吉岡 真佐樹：公共政策学部教授）



## 「何か」大切なこと

図書館運営委員 沼田 宗典

「解らないことは？」と訪ねると、「何が解らないのかも解らない」という答えがあっさりとかえってくることがある。私の説明の仕方が悪かったのだと猛省する一方で、少しでも自分で深く考え理解しようとする姿勢が無いのは寂しい。想像力をフル稼働させてとにかく自分なりの答えが出せる人こそ、社会で必要とされているに違いない。解らないは 1 種類だが、正誤や質はともかく、考え方は無数に存在する。

一方で、世の中には確かに解らないことがたくさんあるのは事実である。何が解らないのか解らないくらい、確かに世の中は複雑である。経済状況や行き交う人の流れ、地球レベルの気象変動、風の向き、落ち葉の軌跡、など現代科学をもってしても予測や説明できないことだらけである。

「頭が良くて、自分自身も利口で頭がいいと思っている人は、先生にはなれても科学者にはなれない」。また、「人間の頭の限界を自覚して大自然の前におろかな赤裸の自分を投げ出し、そうして大自然の直接の教えにのみ傾聴する覚悟があって初めて科学者になれる」。これらは寺田寅彦の言葉であるが、科学の進歩は確かに人類の自然観を一変させ、科学でなんでもわかってしまうかのような錯覚に陥るが、今の科学の言葉で描き出せているのは実は自然のほんの一部にすぎないのではないだろうか。実際にはほとんど何も解っていないに等しく、今後も全てが解明されることはたぶんあり得ないと思われる。いくら科学技術を発達させ自然を制圧しようとしても、結局は自然が許す範囲でのみ人間の都合

に合わせて有効利用できるにすぎず、最後は自然に問うて、自然から許された範囲でのみ利用可能であることは忘れてはならない。

世の中を理解するための科学の方法論は大きく 2 通りに分けられる。一つは、デカルトに端を発すると言われる要素還元的な手法である。簡単に言うと、複雑な物事を出来るだけ細かく分割して、分割しきったそれぞれの末端要素を徹底的に調べ上げることで分割前の全体を把握しようとする姿勢である。いわば単純化と精査のプロセスであり、近代の自然科学はまさにこのやり方で爆発的な進歩を遂げてきたと言える。例えば、物質は分子や原子、さらには原子核にまで分解してそれぞれについて精査する。また、生物については器官、細胞、オルガネラ、タンパク質、核酸などに分解して、それぞれの性質を徹底的に調べ上げて行く、といったやり方である。現在の自然科学の研究のほとんどは今なおこのアプローチが主流である。今回のノーベル賞の対象になった iPS 細胞への期待は計り知れないが、これもまた細胞を初期化するための遺伝子配列を突き止めるという、まさにこうした還元論的アプローチの究極の成功例であると見ることもできる。

一方で、細かく分割してしまうと、逆にそのものの本質を見失ってしまう場合がある。複雑な生命現象はその典型である。皮肉なことに、生物を理解しようとして細かくしていくとその局所現象のレゾリューションは上がるが、全体はぼやけてくるといったことが起きるのである。生命とは何か？を解くことが生物学の命題なら、仮に全ての要素をしらみ

つぶしに調べ上げることができたとしても、決してゴールは切れないことになる。これは、分解した要素同士をそれぞれを関連させながら繋げ合わせていくと、そこには  $1 + 1 = 2$  ではなく「プラス  $a$ 」の性質が出てくる、という暗黙の事実が存在するからである。一般に、要素への分解と要素の足し合わせは対称な操作ではない。M. ポランニーはこの要素の足し合わせの結果でてくる新たな性質について「創発」という概念を提唱している。例えば、目、鼻、口などそれぞれの要素をどれだけ詳しく説明しても、それらの強い相互関係の結果現れる顔の表情を説明することはできない。繋ぎ合わせる要素の数が多ければ多いほど、この「プラス  $a$ 」は大きくなるのであろう。実際、人は60兆の細胞のただ単なる足し合わせではなく、人らしい感情や知性が生まれてくるのは究極の創発現象であり、これにより生物はもはや単なる物質の塊ではなくなっていく。生命とは何か?の問いに対する「生物らしさ」あるいは「人らしさ」といったものは、きっとこの「プラス  $a$ 」に隠されているに違いない。還元的なアプローチではこの最も大切と思われる「プラス  $a$ 」の部分、単純化のために削ぎ落してしまっていることになる。余分な枝葉を切り落として根幹を見極めようとする行為によって、対象は形骸化し本質は失われる。科学が解明してきたのは世界は、多彩で複雑な世界を、単調で濃淡のみの影絵のような世界としてしか描いていないのかもしれない。ちなみに、私の専門でもある物質科学の分野でも、人工物質(分子など)を相互に関係を持たせながら繋ぎ合わせていくと、そこからやはりこのプラス  $a$  の機能がでてくることが知られている。このプラス  $a$  を物質の中に取り込む努力は化学の使命であり、それは同時に次世代の機能

物質の中に生物らしい柔軟性と知性を求めようとする人類の夢でもある。

複雑な現象は部分を理解すると同時に、全体をありのままにとらえようとする姿勢の中で初めて理解できるものであるものである。こうした2つのモノの見方を同時進行させるといろいろな切り口が見えてくるようになる。特に後者は「プラス  $a$ 」を駆使する創発現象の延長にある。あまり意識されないが、人には複雑なことを理屈ではなく、直感的に大づかみに捉え理解し、判断する能力が本来備わっている様である。分解と精査は誰がやっても同じ結論に達するはずであるが、全体を捉えるアプローチには、個性が入り込む余地が出てくる。理屈ではなく直感で導き出された答え(意見)は間違いなくその人のオリジナルになるであろう。寺田寅彦は身の回りのごくありふれた複雑な現象をターゲットにして、ありのままに科学的に説明しようとした物理学者である。東京帝国大学の教授として科学する人でありながら、夏目漱石の弟子として文学する人でもあった。世の中の切り口は実に斬新であり、「複雑系」「非線形」など現在の先端科学を予見する先見性には驚かされる。その考え方は現在でも色あせないどころか、「解らないこと」を排除しつづけてきた現代科学のどこか歪んだ自然観に一石投じているように感じる。

参考図書：

寺田寅彦随筆集 (岩波文庫)

新しい自然学 蔵本由紀 (岩波書店)

混沌からの秩序 I. プリコジン、I. スタン  
ジェール (みすず書房)

(ぬまた むねのり)

：生命環境科学研究科准教授)

御紹介の「寺田寅彦随筆集」岩波文庫1963-1964刊(請求番号 914.6 || T || 1-5 山本文庫)、「混沌からの秩序」みすず書房 1987.6刊(請求番号420 || P)は、2階閲覧室入口に配架していますので、御利用ください。

## ❖❖❖❖❖❖❖ 平成24年度蔵書整理報告 ❖❖❖❖❖❖❖

8月13日(月)～31日(金)の間、2階閲覧室を休室して蔵書整理を実施しました。期間中は皆様には大変ご不便をおかけしました。

今年度の蔵書整理は例年になく大規模なものとなり、下記の3点を休室中(一部は9月も継続)に行いました。

- ① 蔵書点検……アルバイト学生さんの協力も得て、図書館内のほぼ全ての図書(約165,000冊)のバーコードを1冊ずつ読み込む作業を行いました。不明図書は24年度-31冊、22年度-42冊、21年度-58冊と年々減少しています。

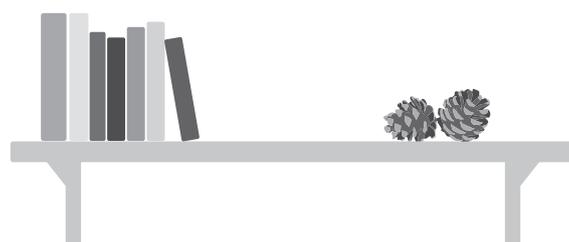
- ② 3階書庫書架の棚板増設……収蔵冊数を増やすため、書架の棚増設を行いました。今回棚を増設したのは書庫の南側部分です。

書架の棚数を7段から8段にすることでわずかですが収蔵冊数が増加します。図書館内に新たに書架を増設する場所がないための苦肉の策です。蔵書点検が終了した箇所から順番に棚を増設し、図書を移動という作業を行いました。移動冊数は約43,000冊にも及び、暑い中大変な作業となりました。



- ③ OPAC 所在表示の変更……大規模な移動を行った3階書庫の所在表示を実態に応じたものに変更しました。

所在に新たに3F書庫(中国書)、3F書庫(洋書)、3F(大型洋書)が加わりました。3F書庫の2ヶ所に「3F書庫案内図」を掲示していますので図書を探される際の参考にしてください。





# 10万冊突破!

2012年9月26日(水)午後12時過ぎ、学生さんに貸出した冊数が10万冊を突破しました。これは本学が2008年4月1日に公立大学法人となって以降の貸出冊数を、本学学生さんのみカウントした数字です。

10万冊目の本を借りられたのは、生命環境学部食保健学科1回生の安藤千晶さん。「学び」推進の記念として、図書館手作りの賞状と府大グッズをお渡ししました。

このことは、事前に利用者の方には一切予告しない、初のサプライズ企画。喜ぶ職員の前で、安藤さんはかなり驚かれたようでした。が、図書館について少しお話をうかがうことができました。「図書館は、わりと利用していると思います。特に夏休みになってから、小説をたくさん借りて読んでいます。」とのこと。この日も3冊の小説を借りられ、そのうちの1冊がみごと10万冊目になりました。図書館への希望はありますか?という質問には、突然のことでもあり「1回生なのでまだよくわかりません。」という控えめなおこたえでした。

法人化後4年半足らずで学生さんへの貸出冊数が10万冊を突破したことは、ここ数年の貸出冊数の増加とともに、図書館にとっても大きな励みになりました。これからも、学生さんの学習や研究をバックアップできる場として、学生生活になくてはならない施設として、サービス向上に努めていきます。



## ニューフェイス登場!



図書館1Fのホールに新しい掲示版があるのに気がついた方も多いと思います。

本学学生のサークル『森なかま』のみなさんに作っていただきました。実は、図書館が使っている木製の掲示版は、合同講義棟入口にある大きなものも含め、全て『森なかま』のみなさんに作っていただいたものです。ありがとうございます。

新しい掲示版は、早速データベーストライアルの広報ポスターを貼って活用しています。

これからも、このやさしい木の香りのする掲示版にいろんなお知らせをしていきますので、注目してください。



# 図書館日誌

平成24年度第1回附属図書館運営委員会（7月25日）の開催結果を報告します。

最初に「自己評価・あり方検討」、「選書」、「電子ジャーナル」の3つのワーキンググループ（WG）のメンバーを決定しました。

次に、平成23年度事業及び決算報告、平成24年度予算の提案があり、承認されました。

図書館の大きな課題である、「新図書館整備計画」及び「電子ジャーナル」について協議しました。

まず、「新図書館整備計画」については、現在、基本設計中であり、今後管理運営等について「自己評価・あり方検討グループ」を中心に検討し、運営委員会で図書館としての意見を取りまとめていくことが確認されました。

また、「電子ジャーナル」も、教育・研究の基礎基盤として重要であり、より効果的な導入を継続するためには、安定的な予算の確保とともに予算の増額が不可欠であり、ワーキンググループで方向性について検討し、運営委員会で図書館としての意見を取りまとめ、大学当局に要望していくことが確認されました。

今後とも、よりよい図書館として管理運営に努力していきますので、皆さんの御協力をよろしくお願いいたします。

## 図書館運営委員会

所 属	職 名	委員氏名	所属WG名
附属図書館	館 長 (文学部教授)	も り 司 朗	
文 学 部	教 授	山 崎 福 之	自己評価・あり方検討
	講 師	出 口 菜 摘	選書
	准 教 授	上 島 享	電子ジャーナル
公共政策学部	教 授	大 島 和 夫	自己評価・あり方検討
	講 師	竹 部 晴 美	電子ジャーナル
	教 授	津 崎 哲 雄	選書
生命環境科学 研 究 科	准 教 授	沼 田 宗 典	選書
	准 教 授	佐 伯 徹	電子ジャーナル
	教 授	大 谷 貴 美 子	自己評価・あり方検討
	教 授	吉 富 康 成	電子ジャーナル
	准 教 授	田 淵 敦 士	自己評価・あり方検討
	講 師	辻 山 彰 一	選書
附属図書館	事 務 長	西 川 昌 良	
	専 門 幹	久 保 直 弘	

## カレンダー

### 開館時間等

9:00~ 21:00	9:00~ 17:00	休館 土日祝 年末年始
----------------	----------------	-------------------

☆閉館時の図書の返却は、図書館西側(喫煙コーナー付近)の返却ポストをご利用ください。

☆年末年始の休館が曜日の関係で例年より長くなっています。ご注意ください。

### 2012年12月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

★12/10(月)～ 冬休み長期貸出開始  
返却予定日 1/17(木)

★12/28(金)～ 年末休館

### 2013年1月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

★年始は1/7(月)から開館

★1/17(木) 冬休み長期貸出図書返却期限